
You don't Know

LIDY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

You don't Know

【Nコード】

N1443B

【作者名】

LIDY

【あらすじ】

女は許して、男は試す。どちらの思惑もすれ違っばかり。

貴方は知らない

部屋を見回して軽くため息をついた。

小さなアパートは部屋がひとつしかない。

狭い部屋に置かれているベッドはこの部屋を借りたとき
二人で中古のベッドを買ったのだ。

しっかりした造りのベッドに安物のスプリング。

バザーで買ったブルーのベッドカバーに皺が寄っている。

少し離れた枕。

ベッドと鏡台でもう一杯一杯の部屋。

ずっと閉じられたままの窓。

明けても隣のアパートのうすボケた壁しか見えないという理由から。
一歩足を引いてドアを閉じる。

静かに私の視界からブルーのベッドカバーが消える。

薄くまずいコーヒー

電車が通る度に揺れる部屋。

一口飲んだだけではおって置かれた

欠けたマグカップの中のコーヒーが漣に揺れる。

電車が通り過ぎると、女がシャワーを浴びている音が聞こえる。
この部屋は音がとまることがない。

ジャケットから煙草を取り出し

どこかのレストランののマッチで火をつける。

かさかさに乾いた唇に煙草がくつつく、

気落ち悪い感触に眉を顰める。

それが引き際のサイン。

ジャケットを羽織る。

甘い香りが服から香る。

甘ったるい、安物ペロペロキャンディー。

この胸の痛みを

五年前に荷物を詰めた鞆にまた荷物を詰める。

数少ない服をドンドンたたんで詰めていく。

あつけないほど少ない服。

それは二人での生活の薄さを感じさせるのには十分で、
またため息をつく。

化粧品も詰めて鏡台の上に手を伸ばす。

二つ並べて置かれた香水の壇の前で手が止まる。

去年のクリスマスに送りあったもの。

くどい香りが嫌いなのであつさりとしたアクアマリンをウィルに送
った。

香りはウィルの雰囲気によくあつて私は幸福だった。

不安なのは朝のせいかもしれない

さつさとジャケットを羽織り部屋を出る。

朝の冷気が首元に突き刺さる。

しばらく歩くとメトロの入り口があった。

メトロの切符を買いホームに入るとすぐにメトロがやってきた。
ボロボロの車体に入り込み、空いている席に身を擦り込む。

速く家に帰りたくて仕方なかった。

こんなつまらない夜の後には

ブルーのベッドで眠ってしまいたい。

そして、ターシャの美味しいコーヒーを飲みたい。

どんな思いでこの部屋にいたのか

私は香水をそのままにしておいた。

彼が選んでくれた甘くてクールなゴースト。

皮肉にも私にぴったりのネーミング。

幸福なときには思わない醜い言葉が反乱する。

結局私はウィルにとっては、どうにでもなる幽霊みたいな女だったのだ。

一緒に恋人として暮らしても彼は、私を忘れる。

細細とした小物を入れれば荷造りはおしまいだ。

私は電話に手を伸ばした。

押しなれた電話番号をプッシュして相手を待つ。

まだ早い時間だったがすぐに電話が通じた。

僕が愚かな事は知っているだろう

ホームに下りて、駅を出る。

朝の空気が濃くなり夜を薄めていく。

きつとターシャはもう起きている時間だろう。

ラベンダーのガウンをきて、ニユースペーパーを読んでいるだろう。

昨日は友人ところに泊まると電話かけておいたから疑ってはいないだろう。

ターシャともう六年間付き合っている。

五年前お互い一緒に暮らすようになり単純計算で1800日、43

200時間

共有してきた。

ターシャは穏やかで賢い女性だ。

彼女は恋人であり、親友であり、妹であり、姉であり、母のような存在だ。

電話を切る貴方の向こうはいつも灰色

『どうしたのターシャ？』

「おはよう、メアリー。よく私だつてわかったわね。

私でなかったらどうするつもりだったの？」

『謝るだけだわ。それにこんな時間に電話をかけてくるのはターシャぐらいなもの。』

「・・・今日そっちへ行つてもいいかしら？」

『ええ、もちろんだわ。それは泊まりで？』

「多分・・・しばらくの間になると思うわ」

『ようやくあのロクデナシと別れる気になったの？』

「・・・後でゆっくり話すわ」

『待っているわ、それとも迎えに行こうか？』

「ううん、大丈夫よ。・・・それじゃあ後でね」

『じゃあ、待っているわ』

君はどこまで僕を愛してる？

六年間何回も喧嘩をして何回も許された。

喧嘩の原因は僕の浮気だった。

ターシャは恋人として僕の不実を泣き、

親友として怒り、妹として叱咤し、姉として諫め、母として許した。

ターシャが泣くたびに、まだ大丈夫だと感じた。

しかしターシャが許すたびに、不安が募った。

不安は漠然としすぎていて、愚かに僕は何回も同じ行動を繰り返す。

恋人はターシャだけど公言しておきながら他の女の部屋へ行く。

ターシャが泣くことを知っていながら。

しがらみが消えていくの気づいて

かちゃんと電話を切り狭いキッチンで朝ご飯を作る。

パンを焼き、スクランブルエッグを作る。

シェーカーにミルクと卵を入れ砂糖を加えて振り、ミルクセーキを作る。

焼けたパンを半分切り、マヨネーズを塗り、スクランブルエッグを乗せたサンドをミルクセーキで流し込む。

食べ終わってからコーヒーマーカに豆と水を入れスイッチを入れる。コーヒーを作っている間につかった食器を片付ける。

時計をちらりと見ると、もうすぐウィルが帰ってきてても良い時間だ。私は、重苦しい思いに目を閉じる。

君は今朝も待っている

今日は土曜日だからターシャのバイトも休みだ。

ターシャの劇団のレッスンさえなければ二人ともフリーな一日が過ごせる。

ならば朝から一日ずっとターシャとベッドで戯れるのも良い。

もしくは公園でピクニックもどきをするのもいい。

いつものようにターシャは笑いながら

些細なことを楽しげに話してくれるだろう。

家が近くなる。

ポストをチェックして、郵便物を取り軽い足取りで階段を上る。

カギを取り出しノブに差し込む。

カギの音に耳を澄ますのは私の癖

コーヒーをすすする。

コーヒーが好きなのは私じゃなくてウィルだ。

ブラックのコーヒーを飲む彼に対して私は、

ミルクをいれて砂糖を入れてしか飲むことができない。

コーヒーは好きになれない。

それでも私はコーヒーを入れつつけた、毎朝、毎朝。

ウィルはあたりまえのように用意されたコーヒーをすすり、パンを食べる。

でも、もうそれも終わり。

マグカップを置いて耳を澄ます。

階段を上る音がする。

特徴のある貴方の軽快なステップ。

廊下を踏みしめて、貴方がドアを開ける。

アルカイックな君

ドアを開けるとキッチン兼ダイニングの部屋にターシャが座っていた。

すでに朝ご飯を食べた後らしく食器がシンクに乾かしてある。

どこかに出かけるのか、ジパンと白いブラウスを身につけて

アクセントにみたことのないスカーフが巻かれている。

コーヒーポットのコーヒーを注ぎ一口飲む。

ターシャがコーヒーを入れるとどんな安っぽいコーヒーでも美味く感じる。

君といるのはこんなに幸せなのに。

どうして僕は、ターシャを裏切らずにいられないのだろう。

「ただいまターシャ」

「お帰りなさい、ウィル。・・・昨日は誰に家に泊まったの？」

「トミイだよ。電話しただろう？そんな母親みたいな口をしないで

くれ。」

「・・・トミイはいつからそんな甘ったるい女の香水をつけるようになったの？」

「メトロの中でつけられたんだろ。」

どうしたんだい、ターシャ？今日はずいぶんと機嫌が悪いようだね。」

「ごまかさないで。もうごまかされるのはたくさんよ。」

どうしてなのウィル？この六年間同じことの繰り返しじゃない？

何回もあなたは浮気をして、そのたびに知らぬ顔をしてる。

そんなに私がいやなら、他の女が必要なら別れましょう。

もう、うんざりよ。」

「下手なやきもちはやめてくれよ、ターシャ。」

僕が君を愛していることを知っているだろう？」

「あなたは私を愛していたというべきね。」

あなたは、もう私を愛してないのよ。

ウィル、目を反らし続けるのはもう御仕舞よ。」

冷たいシートに包まる日々はもうおしまい

一気に言い切り私はウィルから視線をはずした。

彼を見ると触れたくなる。

どんなに憎たらしくても、どんなに惨めでも

私が彼と一緒にいたのはやっぱり愛してるから。

でも、もう愛という言葉で片付けられない悲しみが私を覆う。

あなたからの電話。

陽気な声で、後ろから人の声が聞こえる。男も・・・女もいる。

男友達の家泊まる。それは本当に男友達なの？

女の家でなくて？

朝を向かえあなたは帰ってくる。

やけにやさしく、他の女の匂いをさせて。

「もう、別れましょう。」

荷物はもうまとめてあるからすぐ出て行くわ。

この部屋はあなたに任せるわ。

ここに住もうが、他の女のところにいつて住もうが好きにして。

私には関係のないことよ。」

「ターシャ！！勝手に話を決めないでくれ。

僕は君と別れる気はないよ。」

「何のために私が必要だというの？！

朝、コーヒーを入れて、洗濯して掃除をさせるため？

シーツを暖めて、あなたとセックスするため？

私はあなたの母親でも、セックスマシーンでもないわ！！」

「落ち着けよ、ターシャ。」

僕がいつ君をセックスマシーンだなんていった？

君は僕の恋人だろう？」

「離してウィル！！やめて、キスをする気分じゃないわ。」

君の手が僕を弾く

君にキスを拒まれたのは初めてだった。

ターシャはうつむいて、ポケットからキーを取り出した。

そして静かに机の上に置くと、僕の方を一度もみずに隣の部屋に消えた。

そしてすぐに荷物を持って現れた。

五年前僕と暮らすときに持ってきた、鞆に荷物を詰めて。

そして、あっさりと僕のそばを通り過ぎた。

ターシャからいつもの香りがしない。

甘い、僕を擽る魅惑の香りが。

それが、語るのは君の裏切り。僕の浅はか。

さようなら

外に出ると 冷たい空気が私を覆う。
景色が歪む。

どうして こんなに愛しているのに
愛しているのに。

耐えることが愛なのかしら？

どんな試練にも耐えぬいた先にあるのが愛なのかしら？

それならば 私はもう落第者だわ

もう耐え切れないと、手を離してしまったのだから。

愛しているのに 私は 去っていく

なんて愚かなターシャ。なんて愚かなウィル。

君の名残に思うのは

行ってしまった君の後を追いかけることなどできないのか？

君を追いつめたのは僕。

浅はかで軽薄なのは僕。

どうして、もう一度なんていえるというのだろう。

こんなに愛しているのに、どうして僕は君を追いかける事が出来な
いと言う？

愛しているから？

それならば、必要な愛なんて捨て去ってしまいたい。

呼吸するように僕には君が必要なんだ。

なくては生きていけないんだ。

なんてエゴイスト。それでも僕は。

ねえ 行って

追いかけてきてよ。

まだ私を愛しているなら。

愛しているというて。

許すなんて言葉も割り込めないほど、激しく抱きしめて。

ねえ 言葉が必要じゃないように。

まだ やり直せる予感があると

ねえ うんざりだなんて嘘だから いった

愚かだから私たちは恋をして、

傷つけあって、もう一度を夢見てきたんだと。

もう一度だけなら愚かになってもいいから、もう一度なら。

望みはひとつだけ

僕はアパートのドアから駆け出した。

まだ、遠くへ行っていないはずだから。

お願いだよ、ターシャ。

行かないで。行ってしまわないで。

どんなに罵ってもいいから、僕を捨てないで。

僕には君が必要なんだ。総てにおいて君は僕の指標だから。

どうか、エゴイズムでもなんでもいいから、行かないで。

望みはひとつだけ

「・・・行かないで。」

「・・・どうして・・・ウィル。あなたは・・・同じことを繰り返したがるの？」

「・・・わからないよ。でも君を失いたくないんだ」

「・・・あなたは卑怯だわ。」

・・・トゥルル　トゥルル

「はい。」

『メアリーよ。ターシャ、貴方いつたい何時になったら来るの?』

「ごめんなさい。色々あったの・・・というか・・・わたしね。」

『その声を聞いたらわかるわ。』

あの馬鹿とよりを戻したっていうんでしょ。

同じことの繰り返しにならなきゃいいけど。

それであんたは後悔しないのね?』

「ええ、多分しないわ。彼を・・・愛しているし・・・あ、私たち引越すことにしたの。」

『どこへ?』

「NYであることは変わらないけど、彼の絵がどんどん売れてきたしもう少しだけ治安のいい場所へ引越すの。」

『それですべてが解決されるなんて思ったら間違いよ。』

「わかってるわ。彼の手綱はしっかり握っておかなくちゃね。」

『わかってるならいいけど、あれは手ごわいわよ?』

「知っているわ。私が好きになった男よ?」

『遅しくなってきたわね。そんなあんた嫌いじゃないわ。』

「私もよ。あ、彼が呼んでるわ・・・それじゃあメアリーまた電話するわ。」

『ええ、それじゃあ・・・bye。』

ツー　ツー・・・

End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1443b/>

You don't Know

2010年10月9日15時13分発行